



平成 29 年度新農薬実用化試験から

一般社団法人 日本植物防疫協会 調査企画部 ふな き 舟木 ゆう き 勇樹・ほうじょう ひろし 北條 広

はじめに

一般社団法人 日本植物防疫協会が主宰する新農薬実用化試験では、新しく開発された殺菌剤・殺虫剤のほか、適用作物や病害虫の拡大を目指した試験、新たな製剤や施用法を目指した試験等、様々な試験が毎年実施されている。本稿では、平成 29 年度に実施された新農薬実用化試験の中から、その成分が「新規化合物」と表示されている薬剤を中心に、薬剤を 3 項目に分類（1. 殺菌剤, 2. 殺虫剤, 3. 生物農薬, 天然物, 物理防除剤等）し、試験の概況を紹介する。なお、紙面の都合上、主な薬剤について紹介させていただいた。

I 殺菌剤

AKIF-0003SC

（新規化合物 200 g/l, アグロカネショウ(株)）

本年はじめて登場した殺虫・殺菌剤で、試験計画書では病害防除剤としては予防効果主体とされている。本年度は病害対象に果菜類のうどんこ病、きく白さび病に対して 14 試験が実施された。うどんこ病に対しては、トマト、ピーマン、きゅうり、メロンおよびいちごで 11 試験が行われ、おおむね十分な効果を示した。きく白さび病に対しては 3 試験実施された。多発生条件では効果の程度がやや低い事例があったものの、全体ではまずまずの効果を示した。薬害はいずれの試験においても認められなかった。

BAF-1707 フロアブル

（新規化合物 400 g/l, BASF ジャパン(株)）

本年はじめて登場した殺菌剤で、試験計画書では DMI 剤とされている。野菜分野では、果菜類のうどん

こ病、灰色かび病、すすかび病、つる枯病等に対して 33 試験が実施された。なすおよびトマトのすすかび病やウリ科野菜つる枯病等では高い効果が示されたが、トマト灰色かび病では効果がやや低い事例が見られた。うどんこ病に対してはなす、トマト、ピーマン、きゅうり、メロンおよびすいかで 15 試験が実施された。なす、トマトおよびすいかではおおむね高い効果が示されたが、ピーマンでは効果がやや低い事例が見られた。ピーマンうどんこ病は葉の内部へ病原菌が侵入する内部寄生性であり、なすなどの病原菌とは寄生性が異なる。本年度の結果では、内部寄生性のうどんこ病菌をやや苦手とする傾向が示された。きゅうりおよびメロンでは、効果が高い事例がある一方で、効果がやや低い事例も散見された。薬害はいずれの試験においても認められなかった。

BCF-171 乳剤

（新規化合物 25 g/l, バイエルクロップサイエンス(株)）

本年はじめて登場した殺菌剤で、試験計画書では浸透移行性を有するとされている。野菜分野では、ばれいしょとトマトの疫病、だいず、きゅうり、はくさい、たまねぎおよびレタスのべと病に対して 11 試験が実施され、いずれも高い効果が示された。薬害はいずれの試験も認められなかった。果樹分野では、ぶどうべと病に対して 2 試験が実施された。試験例数は少ないものの、いずれも高い効果が示された。薬害はいずれも認められなかったが、果粉溶脱が認められた事例があった。検討会では、今後使用時期などについて検討する必要があると結論された。

FMC-1603SC

（新規化合物 41.9%, エフエムシー・ケミカルズ(株)）

平成 28 年に登場した殺菌剤で、試験計画書では予防効果主体の新規殺菌剤で、幅広い病害に卓効を示すとされている。果樹分野では、なし、もも、りんごおよびおうとうの黒星病、灰星病に対して 9 試験が実施された。

The Remarkd Pesticides for the Efficacy Study in Japan. By Yuki FUNAKI and Hiroshi HOJO

（キーワード：新農薬実用化試験、新規化合物、殺虫剤、殺菌剤、平成 29 年度）